

移民排外主義はどこから生まれるのか

——ネオリベラル・ナショナリズムの多層的理解に向けて——

**Joppke C., *Neoliberal Nationalism: Immigration and the Rise of the Populist Right*
(Cambridge University Press, 2021)**

米 川 尚 樹

本書の要旨

移民問題や右派ポピュリズムの台頭は欧米を中心に、現在では世界規模の問題となっている。本書は、ナショナリズムとネオリベラリズムの結びつきが、欧米を中心とした国々の移民政策や市民権にいかん影響を与えてきたかを明らかにするものである。

第一章は、ナショナリズムとネオリベラリズムの関係性を明らかにしている。そこで描かれる新たなナショナリズムは、古典的な民族主義ではなく、市場原理と小さな政府を掲げるネオリベラリズムと補完関係にあるとされる。新たなナショナリズムは、グローバル化によって国際移動が盛んになった時代において、反移民や反マイノリティなど排外主義的な右派ポピュリズムとして現れる。それらを正当化する論理として、個人の能力や労働市場による移民の選別、移民やマイノリティへの社会保障の縮小といったネオリベラリズムの影響もみられる。

第二章では、欧米諸国のネオリベラルな移民選別政策の発展とともに、欧米における移民の規制や排斥を求めるポピュリズムの高まりが描かれている。国家は移民を、学歴や労働市場によって選別された上層の移民と、家族移民や難民といった選別の対象とされにくい移民とに二分化し、それぞれ異なる移民政策を発展させている。国家は上層移民を「望ましい」「競争力を高める存在」として扱い、市場の原理に基づく選別が行われる。一方で、選別の対象とされにくい家族移民や難民は社会福祉の制限や在留資格の厳格化の対象となる。新たな右派ポピュリズム勢力の台頭によりこれらの移民選別や社会福祉の制限、移民排斥の動きが加

速している。イギリスにおける移民の管理や排斥を背景とした EU 離脱（ブレグジット）、アメリカにおいて移民排斥を唱えるトランプ政権、ドイツの 2015 年の難民危機における難民受け入れとその後の移民排斥を掲げる政治勢力の台頭はその具体例である。

第三章では、獲得市民権（earned citizenship）について議論されている。市民権は、それまでの生得的な権利であったものから、獲得すべきもの、あるいは特権に変容してきている。市民権は、欧米諸国を中心とした政策変化によって、獲得がより困難なものになりつつある。永住権獲得や帰化が厳格化され、労働を中心とした義務、言語能力だけでなく国家への忠誠、軽微な犯罪に対する制裁の強化が進展している。一方で市民権は容易に失われるようになっている。欧米におけるイスラム過激派によるテロを契機として、安全保障と市民権剥奪の議論が盛んになり、二重国籍者を特に対象として市民権が剥奪される事例も出ている。この市民権の変容は、福祉排外主義とも関連する。移民だけでなく国民を含めたすべての成員が社会福祉を利用する際は、個人の国家や労働市場への貢献、市民権テストなど多様な条件が課されるようになってきている。

第四章では、ネオリベラル・ナショナリズムを、リベラル国家に内在する構造そのものが変化したものであるとして捉えている。リベラリズムの経済的自由主義の要素や多文化主義的な要素は現在でも残る。ただし中間層の没落と格差拡大の時代において右派ポピュリズム勢力は、ネオリベラリズムの個人選別の要素を内面化し、ナショナリズムと関連させ移民を標的化した。ポピュリズムは、経済的な問題に帰着するのではなく、むしろネオリベラリズムの個人ベースの選別を一部取り入れながら発展し、結果として第二章の移民選別や第三章で論じた獲得市民権の台頭に寄与している。

本書の貢献と都市移民ガバナンス研究

本書の著者 Christian Joppke は、ドイツ出身の政治社会学者であり、欧米における移民問題やシティズンシップ研究の第一人者である。評者は、イギリスの移民政策および地域自治体の移民支援の実践を研究しており、本書で扱うネオリベラル・ナショナリズム論も研究関心と深くかかわる。これまでも彼の著作から欧米諸国における移民政策や支援、市民権に関する理論や詳細な事例を学んできた。ここでは著者の研究貢献とともに、評者が研究対象としてきた都市における移民政策や支援を含めた研究とどのように交差するか議論したい。

本書のオリジナリティとしては、まずネオリベラリズムとナショナリズムを矛盾でなく結合として移民問題やポピュリズム問題を通じて描いた点である。ネオリベラリズムと移民の問題は、これまで欧米における移民に対する社会福祉制限政策に関する研究では多く描かれ

てきた。一方でナショナリズムは、ネオリベラリズムとは矛盾したもの、あるいは対立するものとこれまで描かれてきた。本書は移民排斥を主張する右派ポピュリズムの台頭も分析の対象に含め、新たにネオリベラリズムの影響を受けたナショナリズムを描いている。

次に獲得市民権の議論も本書のオリジナリティの一つといえる。この分析枠組みによって現在の欧米諸国の移民政策や市民権の変容が理解できる。獲得市民権の概念は、古典的なリベラルで包摂的なシティズンシップ議論 (Marshall 1950) や、1990年代における国民国家を超えたポストナショナルな議論 (Soysal 1994) とは異なっている。本書では、そういった従来のシティズンシップ論に、新たなナショナリズムの台頭とネオリベラリズムを組み入れ、市民権は獲得すべきものに変容しているという議論に発展させている。イギリスをはじめ欧米諸国において、市民権は言語や能力によって獲得すべきものへと変容し、厳格化され、容易に失われるよう制度の変更がなされている。これらの変更によって人々の社会福祉へのアクセスは制限されている。この議論は、移民だけでなく市民や国民に対しても関係する点が示唆的である。

ただし著者は国民国家を主たる対象としているが、都市、移民支援、移民当事者などといったメゾやミクロのレベルを主たる分析対象としていない。評者が研究対象とするローカルな領域における移民問題については、一定程度言及されているものの、本書では十分に明らかにされていない。都市レベルでは、都市独自の移民政策や移民支援に関する研究が近年発展している。また都市に影響を与える国家およびEUなどの超国家との関係性において移民の包摂や統合を考察するマルチレベル・ガバナンス論は近年、都市移民研究で展開されている (Caponio et al. 2018; Zapata-Barrero 2024)。このローカルな移民統合や包摂は、例えば評者も研究している聖域都市ともかかわる。欧米では在留資格にかかわらず庇護申請者や非正規移民も支援しようとする都市 (聖域都市) が発展している。聖域都市 (イギリスでは City of Sanctuary、北米では Sanctuary City と表現する傾向がある) とは、地方自治体によって細かな政策や定義は異なるものの、非正規移民に比較的包摂的な姿勢を取っている地方自治体の総称である。イギリスにおいても聖域都市に関する議論や関連する移民支援が展開されている (米川 2025)。これは前述のネオリベラル・ナショナリズムとは異なる論理に基づく、都市独自の展開であるといえる。

しかしこれらの聖域都市を含む都市移民包摂研究は、都市独自の政策や支援、その変遷を描いてはいるものの、移民選別や社会福祉制限的政策との関連などマクロな社会構造と関係させたメカニズムが十分に描かれているとは言い難い。言い換えると、都市レベルの包摂実践がネオリベラル・ナショナリズムの構造的制約下でどう機能するかは問われるべき課題である。聖域都市や類似の政策は欧米で近年拡大しつつあるものの、同時に非正規移民を含む

移民全般に対する批判的な声も高まっている。一見すると都市独自の展開に見えるが、実際にはこうした包摂的实践も国民国家レベルのネオリベラル・ナショナリズムの影響から完全に自由ではない。聖域都市の政策や移民支援の担当者も必ずしもすべての移民を支援しているわけではなく、緊縮財政の影響や中央政府からの介入を排除できず、むしろ取り込んでしまっている事例もある。例えば評者がフィールドワークしたロンドン・ルイシャム区では、聖域都市を標榜しながらも、実際には中央政府の緊縮財政により移民支援予算が削減され、支援の実践は構造的な制約を受けている。

したがって、本書のネオリベラル・ナショナリズム論は、都市における移民包摂研究の課題に対しても有効である。都市における移民ガバナンスを考える上でも、国家レベルの政策やポピュリズムの台頭によって移民の選別や非正規移民へのバッシングが高まるといった文脈からの影響を考慮に入れる必要がある。ネオリベラル・ナショナリズムの構造的制約と都市における移民包摂の実践がいかに成立するかを理論化することは、今後の都市移民研究の重要な課題となるだろう。

参考文献

- Caponio, T., P. Scholten, and R. Zapata-Barrero, eds., 2018, *The Routledge Handbook of the Governance of Migration and Diversity in Cities*, London: Routledge.
- Marshall, T. H., 1950, *Citizenship and Social Class*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Soysal, Y., 1994, *Limits of Citizenship: Migrants and Postnational Membership in Europe*, Chicago: University of Chicago Press.
- 米川尚樹, 2025, 「イギリスの聖域都市運動と移民支援——国の移民政策に対抗する都市の移民支援に着目して」『社会学評論』76(3): 491-506.
- Zapata-Barrero, R., 2024, “Resilient urban turnaround in migration governance studies,” *International Migration*, 62(4): 20-40.